

安心できない子どもたち

みなさん、こんにちは、ただいま、ご紹介いただきました、イコールのセンター長 五十嵐猛 です。今日は、人権講演会ということで、お招きをいただきましたが、私はここ4年間ほど、この三重町にも大変お世話になっておりまして、国道326号沿いの三重町と犬飼町の境の所のこどもデイサービスなごみ園にて務めさせていただいております。

これからは私が専門として関わっている発達障害についての話をさせていただきます。私はこれまで約12年間、彼等の支援に携わっているのですが、付き合いとしては、36年間、生まれたときからありまして、いろいろな方にも接してまいりました。しかし、それでも、まだまだ理解が難しい点も多く、日々、色々なことを彼らから教わっております。そんな中で、今日は、みなさんにご理解をいただくために、参考となる絵本を幾つか用意してきております。

絵本「たっちゃん、ぼくがきらいなの」岩崎書店

作/さとうとしなお 絵/みやも ただお

この本を読ませていただいて、みなさんには、自閉症には、かんじるアンテナ（心のでんぱと感覚）に障害があって、その障害のために、心の電波が届きにくく、本人が常に不安にさらされやすい状況にいることをご理解いただけたと思います。そして、私たち支援者の立場は、そういった不安を人に伝えることができずに困っている彼等の通訳をすることであるとともに、同じように、彼等の気持ちを言葉等に代えて伝えることのできる通訳者を1人でも多く増やしたいという想いで、こういった機会をいただきながら、普及・啓発の活動をしております。今日一日の中で、どれだけみなさんにご理解いただける話しをできるか不安ではありますが、これを切っ掛けに、彼等に対しての理解を深めていただくことを期待しておりますので、どうぞ、よろしく願いいたします。

彼らの悩み

彼らにとっての最大の悩みとは何のであるかといいますと、それは、人とギクシャクした関係になりやすいことです。彼らの中には、高機能とか、アスペルガーとって、知的能力が非常に高い方までいらっしゃるのですけれども、これが原因で、なかなか社会生活が難しくなっている方も実際に多くいます。それでは、どうして、周囲の人とすれ違いがおきやすいのか？ どういった面で障害や問題を抱えやすいのか？ その謎解きとして、本来は、いろいろな原因があるのですが、今日は、彼らが抱えている悩みである感覚過敏や、フラッシュバック、心の理論について紹介させていただきます。

感覚過敏

虫歯が進行してしまって、水を口に含むだけで跳び上がるような痛みを経験した方も、この中にはいらっしゃると思います。これは知覚過敏といわれていま

すが、もしも、それが全身にあると考えてみてください。神経の伝達回路がギクシャクしていたり、剥き出しになっているような感覚、彼らがそういった5感にも知覚過敏のようなものを有している場合、我々が平然と過ごしている社会生活の中でも、彼らは針のむしろに居るような気分になっているかもしれません。ある人は、「シャワーが痛い」と、そして、ある人は騒音に対して「耳がいたい」人から感情的な発言を受けると「言葉が機関銃で撃たれた時のように胸に突き刺さる」という、知覚に対する悩みを抱えている人が多くいます。こういった過敏な反応に対する原因は、まだよくわかっていませんが、私たちと彼らとの間には、かなり知覚の仕方に違いがあることは事実であるようです。そして、これを周囲の人に説明したり、伝えたりすることが苦手なため、なかなか理解してもらえない事が、彼らが安心できない原因の1つになっています。

フラッシュバック

タイムスリップ現象とも言うのですが、これは、時間の流れを無視して、現在の状況と良く似た感情的な場面のフラッシュバックが生じ、再体験されてしまいます。これによって彼らが突然パニックのような状態になることがあるのですが、原因がわかりにくいため、対応も難しいとされています。例えば、毎年、秋になると過去の失恋を思い出して憂鬱になる方が居ると思いますが、彼らも秋になると、運動会の苦労体験を思い出してパニックになりやすくなる方も多くいます。特に、重度の知的障害を持つ方は、現在・過去・未来の区別がつきにくいため、今年の苦労があたかもさっきの出来事のように思い出されやすく、ピストルの大きな音や彼らにとって意味不明な行動を求められるなどの不快な体験を思い出してパニックになったりする場合があります。それも、思い出す原因となるものが、人それぞれでわかりにくかったりすることも多いため、そういった時に、無理に彼らに求めることは火に油を注ぐような事につながり、余計にフラッシュバックをしやすくなったり、その事が原因で暴力的な行為に至ったりしてしまうようです。彼らが集団に入りにくい原因は、こういった状況の中で、外傷的な体験をしてしまっているからで、適応を求めるためには、その「ロクなことがない」と思っている不安要因を推理して、そういった事が起きないように、あるいは、やむを得ずに起きる場合は、その時は回避できるような配慮を行う必要があるわけです。

このフラッシュバック現象が起きやすい為、彼らにはなるべく外傷体験をさせないことが大切です。

また、視覚優位といって、目から入る情報が記憶にとどまりやすい彼らは、その不快な時の記憶を、われわれのようなアバウトな記憶ではなく、鮮明な画像として頭に蘇らしてしまうため、まさに過去と現実とのギャップに戸惑ってしまい、その不安も一層に強くなりやすくなっています。

心の理論

次の心の理論についてですが、この絵本の中では、アンテナに例えてありまし

たが、このアンテナのようなものがギクシャクしているお陰で、彼らは他人と心が通じにくくなってしまっているようです。

これについては、簡単な実験例がありますので、それに沿って話をすすめてみましょう。

アニメーション「心の理論課題－ハムスターの問題－」DIK 教育出版

小池敏英（東京学芸大学）監修 藤野博（東京学芸大学）著

みなさんは、今の女の子の気持ちをどう捉えますか？ 彼女は、本当はハムスターが欲しかったはずなのですが、くまのぬいぐるみを喜んで受け取っていましたね。これには、「お母さんが自分に向けてくれている愛情を感じ取り、そのお母さんの気持ちを裏切りたくない」といった気持ちの流れを解釈することができるわけです。これを心の理論とよんでいます。つまり、これは、相手の気持ちを察して、自分がどのように振舞うべきか考えることができている状態です。

しかし、これを見た軽度の自閉症やアスペルガーの子どもは、その女の子の、そういった気持ちの流れを見通すことができているため、「彼女は、クマの人形でも本当に良かったんだろう」と解釈をしてしまいやすいようです。同様に、この女の子の立場になっても、プレゼントは誕生日だから買ってもらえるもので、そこに、お母さんの気持ちに対する解釈まではなかなか行き届きにくいようです。そのため、もし、この女の子が自閉症だった場合は、ハムスターじゃなかったことに対して、大騒ぎをしてしまったたりするわけで、相手の気持ちを推測して満足を得るといった作業は、彼らには、なかなか難しいことのようにあります。

こういった相手の心づもりを理解して行動できない点、これが、最も彼らが安心して地域生活を送りにくくなってしまう理由であります。つまり、人から「こうしなさい」と指示をされても、その意図がわからなかったり、相手が自分にどのような想いを向けて接触を求めてきているのかわからない、言葉の含みを察する事ができにくいなど、こういったすれ違いが彼らと私たちとの間で誤解を生み出したり、不安を招いてしまう原因であるわけです。大げさに言うと、此方が呼びかけるつもりで肩を叩いただけでも、彼らには「殴られた」というような誤解を生み出す虞があるということです。

高機能自閉症やアスペルガーの本人が相談に来られる場合によくあることです、一方的にしゃべった後で、相談の終了時間が過ぎた事を告げてもピンと来ない。こちらから、回りくどく言ったり、時計をチラチラ見るなど、ソワソワした態度をとっても伝わりにくいわけです。ですから、彼らには、予め此方の都合や終了にして欲しい都合をハッキリと伝えておく必要があります。

中には「今、私がどう思っているか？」と尋ねると、「忙しいから、話しをやめてください」くらいは応えられる方もいます。しかし、自分が夢中でしゃべっている時は、その事に気が付かない。いわゆる、しゃべっている時には、それだけには集中しており、他の事まで気配りができない。しゃべりながら・・・

ができにくいわけです。こういった例は多かれ少なかれ、我々にもあるものですが・・・。彼等とは程度が違って、いろいろな間接的な振る舞いは受け止めにくかったり、気づいてもらにくい。結果、相手を感情的にさせてしまったりすることがあるわけです。ですから、対応に困ったときは、「やめろ」「うるさい」ではなく、彼らにこちらの気持ちを考えるチャンスを与えてみてください。すると、わかってくれて、自分の言動を控えられる人も居ます。

今の話しになると少し大げさかもしれませんが、この心の理論については、自閉症の子に限らず、今のように対人関係が希薄になってきている社会の中では、子ども全体が学習できにくくなっているようにも思われます。もともと、自閉症の子が心の理論が育ちにくい原因の一つとして、対人関係の希薄さが言われていたのですが、これは、普通の子どもにも及んできつつあると思われる方も少なくないようであります。

必要な配慮

では、こういった特性を理解した上で必要な配慮とは何でしょうか？

まず、誰にでも出来ることは、①刺激や情報の整理することです。これは、彼らが敏感に感じて不安になっている要因となる物（音や環境）を取り除くことや、現在・過去・未来や始まりと終わりを分かりやすく伝えることであります。そして、2番目に必要な配慮は②コミュニケーションの取り方を工夫することです。これは、言葉でのやりとりが難しい場合に、絵やジェスチャーなどを用いながら伝えるといった方法をとりながら、彼らが見通しを持ちやすくなるように工夫をするということです。特に、自閉症の子は視覚優位とあって、「聞く」ことよりも、「見て」判断することの方が得意でありますので、こういったコミュニケーション形態は得意とするところです。しかし、その際に忘れてはならないことは、肯定的な気持ちを伝え合うような配慮であって、その際に、少し難しいことでもありますが、次の配慮点として③相手の心づもりや、求めている行動の意味を彼らに通訳することが大切になってきます。彼らにとって、私が良かれと思って求めている事、その意味をもう一度確かめて伝えるようにしてみたり、彼等の気持ちを確認しながら付き合ってみたりしてください。例えば「君にこれが出来るようになると、君の事を大事に思っているお父さんやお母さんが喜ぶんだよ」「だから、もう少し頑張ってみようよ」といったような声をかけたりするなどの配慮を、そして、最高の支援とは、そういった関わりの積み重ねによって、④彼らが「あなたのような理解者が居るから安心だ」と思えるようになることです。変化のある生活の中でいろいろな不安を持ちやすい彼らは、傍に安心できる人の存在が一生を通じて不可欠であります。ですから、もしも周囲に困っている彼らが居たら、ぜひ、私たちのような専門スタッフにも教えてください。そして、その上で、彼らが安心して暮らせるための支援を一緒に考えていただければ、幸いです。

では、次にADHD（これは、注意欠陥多動性障害とも呼ばれております）に

ついで説明している絵本もありますので、ここで紹介させていただきます。

絵本「オチツケオチツケこうたオチツケ」岩崎書店

作／さとうとしなお 絵／みやも ただお

こういった行動にブレーキのかかりにくい子どもに対して、理解と配慮をお持ちいただくことの必要性を感じていただけたと思います。では、どのように彼らを理解し、配慮していけばよいのでしょうか

それは、まず、ブレーキがかかりにくくなってしまう原因は、本人の許容量を越すたくさんの刺激や情報です。彼らは、いろいろな情報が飛び込んでくる場に居ると、それに対して次から次へと反応してしまっ、思いがけないところでトラブルを起こしてしまいやすいわけです。

記憶と連鎖の障害

また、悪いことと理解していても、判断力が働かずに衝動的に行動してしまうことが多々あります。こういった場合、本人には悪気はないのですが、結果的に周囲に迷惑をかけてしまうことが少なくありません。そして、こういった失敗を繰り返して問題児としてレッテルを貼られてしまうことが多々あります。彼らは、先読みが苦手なため、失敗をしやすい環境におかないということや、注意された事や守らなければいけないことを意識化できやすいように手助けする必要があります。例えば、約束は口約束で終わらせない、必ず、一緒に手書きで紙に書いて、見えるところに貼る。とか、注意する際には、必ず、その理由付けや先読みまでアドバイスしてあげることが大切です。つまり、ただ禁止をするのではなく、それが何故いけないのかということ伝えることが重要になってくるわけです。その際に、対立して彼を押さえつけるようなやり方ではなく、彼に対して協力的な配慮を持って関わっていくことが大切です。これは、私たちの立場では、「支援」と呼んでおりますが、ズバリ、こういった支援の意味をよく考えることが大事だと思っています。支援とは、押さえつける事ではなく、本人の努力を支えることだと思っています。ですから、私たちは、言葉かけにおいても、「だめ」ではなく、「がまん」と言うように本人の気持ちを支えるように気をつけています。そして、彼等が守れる「約束」や「目標」を此方からも見つけてあげてください。そして、それに向けての支えや頑張りをよく褒めることも忘れないでください。なぜなら、彼らには、まず、「自分が周りから嫌われていない」とか「迷惑に思われていない」「人は自分を助けてくれる」「支えてくれる存在なんだ」という安心感を持つということが大切であって、その上で「自分は出来ない子ではない、できるようになるんだ」といった、自己肯定的な気持ちを持てることが成長に向けてのステップにつながっていくからです。

SSTの実践を通して

さて、こういった発達障害をもつお子さんにとって、これから必要になってい

くことは何でしょうか？ 多動については、高学年になってくると、その問題性は薄れてきます。他にも思いつくことはたくさんありますが、しかし、そこで一番注目されることは社会性であります。その所が成長できていないと、その後も人との関係に歪が出てしまい、生活し難くなっていくことが懸念されます。

そういった中、特に大事な社会的なスキル取得を目指したトレーニングとして、私たちは、**SST ソーシャルスキルトレーニング**（しよせいじゅつを学ぶ？）といった活動を行っています。これについては、専門的な話になってしまうので、今回は深い説明はできませんが、私は、今後、学校教育の中でも、これについては重要視されていくだろうと思っています。簡単に説明すると、これは、社会性を身につけるために意図的にプログラムされた学習方法であって、例えば、何故、挨拶をするのか、された側はどう思うのか、こういったことを省みながら、社会的な行動の意味・振る舞いを学習していくようなプログラムでもあります。

例えば、先日、幼児の子どもにシートベルトを付ける意味をたずねてみました。すると、このような返事が返ってきたのです。「おまわりにつかまるから」。確かに、おまわりさんにも捕まりますが、本当の意味は自分の身を守るためにつけているはずですよ。このように、我々、大人が子どもに生活の中で正しく教えることができていないこと、子ども達が生活の中で本当の意味を理解出来ていないことはたくさんあるようです。

そういった子どもに対しても、SSTとは、例えば、何故、シートベルトをする必要があるのか、しないとどのような事になるのか、こういったことを子ども自身に省みる機会を与え、考えさせ、目標をたてたりしながら、社会的に望ましい対応を修得させていくプログラムです。

例えば、私は中学の時に「シンナーを受けるとどうなるのか」とか、「たばこを吸うとどうなるのか」という授業を受けた事を今でも覚えているのですが、今、考えると、学校で受けた授業の中で、本当に記憶に残っていることというのは、そういう授業なのですよ。

現在のように、子どもが人との関係がどんどん希薄になっていく中、子ども達に正しく社会的な行動の意味を伝える場や機会をつくるということが、大人の責務として、とても重要になってくるのではないかと感じています。

では、その応用品を紹介します。

コミックカード

これは、意思決定が苦手な、それを言葉でも伝えにくいお子さんに対しての補助カードの例です。

プロミスカード

これは、行動にブレーキがかかりにくいお子さんに対しての利用している補助カードの例（男の五ヶ条）です。

ミーニングカードの紹介

これは、先の「シートベルト」ではありませんが、社会的な行動の意味を伝達する際のカードです。「だめ」だけを伝えるのではなく、「何で、ダメなのか」その意味を伝えるための補助カードです。

SST の応用 例えば、

キックミットにだけキックをするように約束したのに、他の人を蹴ってしまい、先生に叱られ、いじけてしまっている子どもが居ました。叱られることは大切です。しかし、そこで、「もうキックミットはさせない」とかしてしまうと、その子にとって、それはどういう影響を及ぼすのでしょうか？

「やっぱり、俺はだめだ」と余計に自分に対しての過小評価を行い、それに伴って、「自分を認めてくれない」人に対しても、同じような気持ちを持ってしまうことでしょうか。彼の本心は、「たまたま、遊びの中で、キック力がすごい」と先生に褒められて、普段、なかなか自信が持てない自分が有頂天になっていただけであって、人をいじめたり、やっつけたかったりしたのではなかったわけです。彼は、ただ、ただ、自分のキック力を人に自慢したかった、相手に認めて欲しかっただけだった。しかし、それが結果的に、どうなるのか、蹴った後のことまで本人に考えがなかなか及ばない。これが ADHD の障害です。ですから、この対策、本人が気付いてブレーキがかかるような対策として、まず、「けっっちゃダメだよ」と言い放しだけの約束ではなく、蹴ったら、どうなるのか、相手にどんな想いをさせるのかシュミレーションしながら、その理由を話し、紙に「人を蹴らない」と書いて貼るような＝視覚的にフィードバックできる機会や経験を本人にさせることが必要だったわけです。更に、彼には人ではなく、逆に、その人の前でキックミットで蹴っている姿を見させられれば彼は満足できていたわけで、やはり、人の注目を浴びて、認められたいという気持ちが根底にはあったわけですから、そうして正しい注目の浴び方を、彼に教えるとともに、彼らが人に自慢できる、注目を浴びることが出来るチャンスを与えてあげるようにすることも大切になってくるわけです。彼が人の意見を肯定的に受けとめて、約束を守っていくためには、自分も人から褒められ、自信も得ていくことも大切です。彼を叱って、人の気持ちを教えることも大切ですが、それだけでなく、同時に、本人のつもりを理解するとともに、相手の気持ちも伝えてあげることが配慮してあげてください。そのことが、結果的に、本人が過ちをおかさないですむことにもつながっていくのです。先ほどの彼には、自分のその気持ちを理解してくれて、正しい方向に導いてくれる大人の支援が必要なわけですから、この子には、逆に、全員の前でキックをさせて、みんなに本人の力を認めさせるチャンスを得る機会をつくり、その場面の中で、みんなの感想を聞いて、意見を出しあい、結果的に、これだけ強いキックなのだから、人に向けたら危険であることや、もしも、されるようなことがあれば、その相手がどんな気持ちを持って、その人に対して、どんな感情を抱くのか、そういっ

たことを確認し合えていけば、本人は自分の取るべき行動、社会的な行動を獲得していくことができいくというわけです。

安心できない子どもたち

最近、こういった発達障害の子どもが増えているように言われ、私もそれを専門にしながら関わらせていただいているところ、今や、問題を抱えているのは彼らばかりでなく、健常の子どもの中でも発達障害を持つ子どもと同様に「不安を抱え、大人の支援が必要」とされている子も増えてきているように思われます。

例えば、学校にナイフを持ち込む生徒、これは、いくら本人に注意しても収まるものではありませんし、逆に、大人が子どもの気持ちに立って考えて関わる必要があります。では、実際にはどうすれば良いのだろうかという、まず、何故、子どもはナイフをポケットに忍ばせて来なければいけないのか考えてみる必要があります。それは、果物の皮をむいて食べるためではありません、まず、その1つの理由は彼は自分の身を守るために持ってきているのです。つまり、不安な状況の中で、自分の身は自分で守ろうとしているわけです。これは、我々の立場でも同じ事が言えると思います。例えば、今、我々がイラクのような危険な場所に行かなければならなくなった時、何も持たずに行くのでしょうか？ 程度は違うかもしれませんが、彼らとその位の心境を抱えているのだと思ってください。戦場に出るような心境がなければ、自分の身を守るための道具は必要になるとは思われません。日本のように治安の良い所に住んでいると、われわれはそういった感覚にピンと来ないのかもしれませんが、子ども同士の世界ではイジメや周囲の無理解等で思いつめている子どもは、たくさんいます。そういった子が、「学校に行きたくない」と大人に訴えてみても、その原因を理解して解決を見出してもらえないまま背中を押されてしまう。学校に行っても先生は忙しくて、なかなか自分の不安に気付いてもらえない。そこで、仕方がないから、自己防衛にナイフをポケットに忍ばせていく。これがこどもの本心なのではないでしょうか。子どもが不安になっているけれど、それを訴えることが出来る大人、理解をしてくれる大人が周りに居ない。そうして、彼らの想いは、不安から怒りに変わり、そして、その怒りも解消することができないまま、恨みへと想いは変化し、積もっていつてしまう。不安ばかりか、怒りをぶつけて、それを受け止めてくれる大人も見つけれない世の中、彼らはとても不幸な状況に立たされていると思います。だから、ナイフを持ってくる子が悪い子ではなく、逆に、その子は、助けたり、耳を傾けたり、守ってあげたりしなければいけない対象である子どもなのです。ナイフの代わりに大人がその子の本心を理解してあげなければいけないと思うのです。また、ナイフを持たずとも、現実の苦しみから逃避しようとしている子ども、そういった彼らが抱えている悩みに忍び寄るもの、それはドラッグです。障害のある子どもだけでなく、健常の子ども達も、日々プレッシャーの中で不安を抱えながら居る子はたくさんいます。このように子どもの「不安」のサインを大人気が付いていって、

守っていくことが、その子の将来を支えていく中で、一番大切なことだろうと私は受け止めています。こどもの器は小さいものです。この器から溢れる水を受け取るのはナイフやドラッグではなく、大人の器、そして、地域での受け皿が一番大切なのではないだろうかと思っています。

まず、こどもの不安を自分の器で受け止める、しかし、それが自分の許容量を越すものであるならば、専門家や地域の人との協力を求めることが大事な事であって、自分だけで抱え込んでしまうことも、その子のためにはならない場合があるということも、知っておく必要があると思います。自分だけで抱えてしまい、結果的に相手を不幸にさせてしまった経験を有している人も少なくはありません。

現実の厳しさ

しかし、これは、私にとっても、大きな課題であることで、問題が大きければ、大きいほど、周囲の人と連携しながら人を助けることは、容易いことではありません。私自身も矛盾を感じ、辛い思いをしてきていることもあります。以前、大分に来る前です、入所施設の中で強度行動障害棟といった、家族や社会、施設までにも「手に負えない」と言って見放された発達障害の人を社会復帰するために療育する所で働いていました。そこには、重度の方だけでなく、軽度の方もいました。しかし、彼は自分で見通しがもてなかったり、こだわりが強い方で、これまで否定的な対応のもとで育ってきたせいか、自分が出来ないことへの不安、周りに認めてもらえない不安、自分でうまく気持ちを整理したり、伝えたりすることができない不安を抱え込んでいました。そんな彼が、作業の「さ」の字も出来ないまま、直ぐに物事をあきらめたり、職員を殴って自己防衛をしたりしていたため、施設に見捨てられてしまったわけです。そんな彼と会って、私は、施設の中で毎日のように彼のカウンセリングを受けながら、周囲と彼との間の気持ちを通訳したり、一緒に目標や希望を見出していったりしました。

このカウンセリングとは、例えば、本人が困っていること、「やる気がない」と怒られて、反発して動かなくなる。そういったトラブルの発生時、本人からは、ちゃんと自分の気持ちが言えない、そういった臨機応変な対応、立ち振る舞いできない。そういった折に、何でやる気が起きないのか、私が掘り下げて話しをしていくと、「仕事が多すぎるからやる気なくなる、僕には無理だ」と本人が言う、現場の人にしてみれば、仕事が出来るようになってきたため、本人により多くの期待していくことは当たりまえなのですよね、しかし、彼には、そういった読み取りもできにくいし、気持ちもうまく伝えられない。しかし、ちゃんと落ち着いて話をしていくと、だんだんと自分の気持ちを表現していくんです。そして、こちらが、「急に増やさないでよ」とか、「何処までやればいいの」とか、言えば良かったね。明日、「自分にとって、この量はきついから、減らしてください、と言おう」と助言すると、そうか、「そう言えばいいんだ」と笑って応える。こういったカウンセリングをしていくことで、職場との関係

調整を行っていったわけです。

私の中では、そんなに特別なことをしているつもりでもなく、自分だったら、どうだろうか？ と考えながら、本当に彼の気持ちを探り、理解し、道しるべをたてていただけのつもりだったのですが、やがて、彼は居残りしてでも自分の課せられた作業をするようになりました。暴力行為もなくなり、笑顔で私に自分の給与を見せてくれるようになり、毎月、彼の給料日は、彼の希望を聞いて一緒に食事に出かけたり、買い物をしたりするようになりました。時々、作業の現場監督の人と言合いになったりすることもありましたが、私が仲介し、通訳することで、やはり、全て丸く収まっていっていました。そうした中、彼と別れて、私は大分に来たのですが、来てから1年後に、彼がもとの普通の施設に復帰したことを聞き、安心していたところ、その半年後に亡くなったとの報告を聞かされました。原因は不明のままでしたが、おそらく、その施設で彼の事をうまく通訳できる人が居なかったことが最大の原因であると思われる。これは、ほんの一例で、今の社会の中では、程度の差はあれ、少なくない話しでもあります。彼等の通訳を出来る人が居ない。気持ちのすれ違いから。生活がしにくくなる、最悪、亡くなってしまうようなことや、体罰などの問題も出てくる。しかし、そんな社会に矛盾を感じて、私の仕事を手伝ってくれる仲間も、ありがたい事に、この大分の地でも増えていっています。そして、地域の中でも、私と同じ様に自分独りでは太刀打ちできないと思っている方は多くいらっしゃると思います。ですから、みなさんと手を繋ぎあい、連携・情報交換しながら安心できる社会を一緒につくっていきたい。彼らに対して理解のある人を増やしたい。その一心で、私の仲間たちは日々、働いています。こういった訳で、どうぞ、みなさん、何かの折に、ご協力をおねがいすることがあると思いますが、よろしく願いいたします。

子どもの「幸せ」

さて、誰もが子どもに願う「幸せになる」という、本当の幸せとは何でしょうか？ 良い大学に入ることでしょうか、お金を儲けることでしょうか、良い大学に入って、お金を儲けて一体、何を子どもに望むのか、よく、安定した暮らしといいますが、その答えの根底にあるのは、やはり「安心」して暮らして欲しいのではないのでしょうか。だから、どんなにお金を儲けたり、良い大学を出てみたところで、安心して暮らせていなければ、本当に意味がありません。むしろ、安心して暮らすためには、周囲に尽くすことも覚えるべきであると思うし、いろいろな見方を受け入れられる力をつける必要があるように思われるのです。むしろ、一つの価値観に縛られてしまうと、逆にそれに向けての不安が強くなりやすいわけで、その不安に掻き立てられていってしまう、それは不幸なことでもあるし、それが実際に社会に本当に活かされるのかも疑問に思われます。今、現場の知らない人が主導権を持って動かしているような社会に対して、誰もが批判的な目を向けていると思いますが、我々のような社会福祉の立場も全く同感です。

また、私も TV ゲームに対しては批判的な見方を否定はできませんが、逆に「遊び」は大切な事で、その中から創造性や人間関係を学べるものはたくさんあると思っています。特に、ごっこ遊び。今のごっこ遊びは、架空の世界の中での事で、つまり、ゲームの中で行うわけですから、生身の人の気持ちに触れる機会が少ないわけです。「日本の子どもの学力が低下した」というけれど、だからといって、今日、日本で抱えている学校問題は勉強ばかりしてどうにかなる問題でしょうか？ 特に、社会に出てから、一番、大切なのは良好な人間関係を築けていけるか、どうか、人間関係の中で、自分の役割をどのように見つけていくことかどうかであって、そういったスキルを身につけるためには、いろいろな人と会話することや、活動を共に経験しながら、人の気持ちに触れる体験や、人の立場に立ってみる経験をすることが大切であろうし、逆に、今では、そういった機会が実際に減ってきていることの方が問題であるように思います。同じ人ではなく、いろいろな人と話をして、気持ちを触れ合えば、いろいろな見方ができる大人にもなっていくだろうし、その分、幸せになれる方法も多く持ちやすいただろうと思う。だから、子どもには、なるべく、いろいろな人と接する機会や共感できる、気持ちを共有する体験をさせたいと思う人が多いのではないのでしょうか？ 東大を出たような人でも、働けなくなってしまう原因は人間関係なのです。やはり、一つの考えに縛られ、上手に人間関係をつくれないう子どもは常に不安を抱えており、生活し難くなってしまうものです。だから、如何に人と良好な関係を結んで生きられるか？ どうやって人を頼りにするか、どうやって人を助けるか、子どもには、それを学校で学んで欲しい。正直、これは、将来的に彼らの受け皿を支援していく我々のような福祉現場の人間からの、学校や家庭の人たちへのお願いでもあるわけです。しかし、これらの問題を解決していくことは、こうして口で言うほど簡単な事ではありません。そして、一教師や保護者だけで彼らに伝えられる問題でもありません。さて、それではどう支援すれば良いのか、それには、みんなが独りで悩みを抱えないこと、周りで力になってくれる人を見つけること、そういった悩みを専門に受けて支援をしてくれる所につなぐ支援が大切であって、「色々な人や機関が混ざってイコールな関係を築いていくことが大切である」。このように私は考えています。要約しますと、どんな問題でもそうなのですが、発達障害を持つとうが、持つまいが、子どもの抱える問題行動には、絶対に何らかの原因がある。そして、これは大人が独りで考えてもなかなかわかるものではない。いろいろな関係者がイコールになって情報のやりとりをしながらの原因を見出し、各々の立場から子どもの支援をして守る。これが「地域で子どもを育てる」ということではないのでしょうか。つまり、先ほどの話しになりますが、大人が抱えきれない器を地域で人が手を取り合って、大きな器をつくって受け止める。これは、むしろ、「地域で子どもを守り育てる」と言い換えていただいた方がよいかもしれない。よく「自立」とは言いますが、その前に、こういった不安を抱えている子どもは、「安心感」がなければ、次の「自立」には移れないと思います。今の若者のニート現象なども、自分の将来を安心して国に預け

られないことから出ているように思われて仕方ありません。批判するのではなく、もっと、我々大人が安心できる環境を子ども達のために築いてあげなければいけないと思う。何故なら、子どもが、自分が困った時に、頼れたり、相談できる場所や大人が沢山いれば、ポケットのナイフは必要でなくなるわけだからです。「持ってくるな」と叱るのではなく、その必要をなくしてしまう。そのような、子どもが安心して暮らせる地域・学校づくりをすることを理想ではなく、むしろ、大人に課せられた義務として実現していくべきなのではないでしょうか。

障害の受容 保護者の苦勞

発達障害は微細性脳損傷が起因しているといわれておりますが、もともと「完全な脳を持っている人はいない」とも言われており、みんな多かれ少なかれ、脳の一部にどこか問題があって、認識できにくいモノがあるそうです。そのために、性格や個性、知能指数などにも差異が生まれるのであって、そこが人の素晴らしい点でもあります。

同様に、視力にしても、聴力にしても、いろいろと個人差があって、一定のラインを越えると、障害として認定されます。私も、ADHDの傾向を自分で感じますし、「今であれば、そういった診断までされているかもしれないな」と思う点もあるのですが、障害に至るには、現在と、今後の生活の上で、それが、どれだけ影響するかどうかであって、やはり、生活が送りにくいような症状に至れば、それを配慮するため、支援を受けやすくなるために、障害名をつけるわけです。これが障害が診断される本来の理由です。しかし、この点を誤解されて受け取られてしまいがちであることが、本人がご家族が障害を受容する上で、戸惑われやすい理由でもあります。

そのため、最近では、この障害という言葉を使わず、「〇〇の支援を必要とする子ども」といった表現をするようになってきています。それが、学校では「特別支援教育」という表現で使われるようになった所以でありまして、今後、私たちの福祉の世界でも表現を変えていかなければならないテーマでもあります。このように、いろいろな議論がある状況ですが、特別な配慮を必要とする軽度発達障害を持つ子どもが居るご家族や、本人が抱える問題として、必ず「障害の受容」がかかわってくるものです。では、障害を受容する際に不安になってくることとは何でしょうか、みなさんも心の理論を働かせて、ご家族や本人の気持ちになって考えてください。

何故、障害を受け入れにくくなってしまうのか？ それは、障害を受け入れていく過程には、「障害があるから不幸になるのではない」「障害があっても周りにそれを理解して支援する人が居るんだ」という安心感が持てれば、本人もそのご家族も障害を受け入れやすくなっていくわけです。例えば、必要な支援を受けながら、分け隔てなく、地域の学校にも通うことができなければよいわけです。そういった意味でも、彼らに対する理解のある地域づくりを目指していかなければいけないのですが、その際に、みなさんには、ぜひ、この機会に、

彼らも社会的な貢献をしていること、つまり、実際に、我々の中にも、彼らの恩恵を受けていることが多々ある点についてもご理解いただきたいと思います。

彼らからの恩恵

代表では、アスペルガーが疑われるアインシュタイン、そして、エジソンはADHDだったとも言われています。トムクルーズは自分に学習障害があるため、レインマンに自ら出演を希望しました。また、山下清は自閉症と思われませんが、他にも日本人では、坂本竜馬なんかも、今では間違いなく学習障害やADHDなどの診断を受けているはずです。

このように、目だった所だけでなく、地域の中でも、彼らの存在によって恩恵を受けることは多々あります。例えば、不良の生徒が、彼らの健気な生き方に触れて更正するように、関わりの中で、彼らはとても純粋な気持ちが私たちにあることを気付かせてくれたりするわけです。他にも、自分の価値観を子どもに押し付けてばかり居た先生が、彼らとの出会いからガラリと変わって、子どもの気持ちをよく考えてくれるようになった。この子のお陰で、自分の指導力がついたという人も実際に多くいらっしゃいますし、そういった先生が教頭や校長を務めていらっしゃる学校は良いところが多い。また、今、教育会でぶつかっている学級崩壊やいじめの問題に対しても、これからはもっと、もっと障害児に対する配慮を子ども全体にも普及することで、解決していけることが多くある。このように私は思っていますし、また、我々が理解すれば、もっともっと彼等の役割は増えていくはずです。是非、そんな見方を持って、地域に住んでいる彼等の将来を考えてあげてください。

最後に、

発達障害に限らず、これから子ども達に身に着けていって欲しいことは、自分が困った時に、人から支援をしてもらうことです。人を頼りに出来るということは、高次元な作業でもあって、特に自閉症は人に甘えられなかったり、人を頼りにしながら生きることができにくかったりする障害であります。そのため、発達障害に限らず、全ての子ども達にとって、人間関係の作り方を学習する機会を絶やさないようにすることが地域で関わる我々の役目であるのではないのでしょうか。そして、保護者の方々に対しては、よく「子どもは親を選べない」といわれるようなことがあります。私は、むしろ、なごみ園に通う方々などを見ていると、これは全く逆さまなことであり、多くの子どもは、自分を守ってくれる親を選んで、この世に生まれてきているように思われるし、そうした姿勢を貫いて子どもに接している親御さんに対して、いつも私は尊敬の念をいつも持たされる。だから、協力もしていきたいとも思っているわけで、これからも、一緒に、大人が子どもを守れる地域、そして、子どもが大人に悩みを打ち明けられるような地域を実現していきましょう。ご清聴ありがとうございました。

人権講演会「安心できない子どもたち」より 2005.11.15